

公益財団法人アイヌ民族文化財団  
野本 正博、立石 信一

「ポロトコタン 最後の一日」  
2018 年制作／上映時間：22 分

1. 一般財団法人アイヌ民族博物館とポロトコタンの 50 年

白老町のポロト湖畔に所在していた一般財団法人アイヌ民族博物館は、2020 年開館予定の国立アイヌ民族博物館の建設工事に伴い、2018 年 3 月 31 日をもって閉館した。前身となる白老観光コンサルタント株式会社によってポロトコタンが開業したのは 1965（昭和 40）年で、半世紀以上にわたって地元白老のアイヌを中心にアイヌ文化を紹介する施設が営まれてきた。

1976 年には、それまでの株式会社を発展的に解消し、調査研究・教育機関も兼ね備えた財団法人白老民族文化伝承保存財団を設立し、次いで 1984 年には財団法人アイヌ民族博物館として再出発を果たした。なお、これ以降もポロトコタンは通称として、地域住民をはじめとした多くの人の呼び名となり残ることになる。

1991 年には過去最高の 87 万人の入場者数を記録するが、これはバブル経済や北海道観光ブームと連動した動きだったといえよう。その後の入場者数は下降をたどることになるが、それと前後するように、体験学習を開始するなど教育機関としての機能を強化して現在に至った。

また一方で、ポロトコタンが開業したのは 1964 年の東京オリンピックの翌年のことであり、国立アイヌ民族博物館が開館するのは奇しくも次の東京オリンピックの開催年（2020 年）と同じである。これは必ずしも偶然の一致ということではなく、時に主体的に、また時には時代の趨勢のなかで、行政の主導による組織形態の変更などによって現在に至ったことを表している。

2. 概要（制作方針）

閉館したことによって、アイヌ民族博物館は歴史的評価の段階へと進んでいくことになる。同時に、2020 年にポロト湖畔には国立アイヌ民族博物館が開館するなど、白老とアイヌ文化を取り巻く環境は新たな段階へと入っていく。当映像は、そのような大きな過渡期のなかで、節目となる閉館日の 3 月 31 日に密着した記録映像である。

白老という一地域の博物館があったことや、どのような施設であったのかはもちろんであるが、そこで働く職員と来館者がどのように接していたのか、あるいはどのようにアイヌ文化を紹介してきたのかを記録することを制作の目的とした。

また、アイヌ民族博物館の前身は観光施設としてのポロトコタンであり、観光施設的な側面は現在に至るまで保っていた。観光収入を財源として弾力性のある自主運営を行い、アイヌ文化の伝承と普及に寄与してきたことから、それをこの博物館の特徴の一つとして描くことを試みている。

映像中には博物館で働いてきた 2 名の職員のインタビューも納めた。一人はポロトコタンの草創期から勤務し、文字通りポロトコタンの生き字引としてあるとともに、アイヌ文化の伝承者として多くの若手を育成してきた職員で、もう一人はまだ就職したばかりでこれからを担っていくべき若手である。二人とも白老で生まれ育ち、小さな頃からポロト湖やポロトコタンに慣れ親しみ、心の拠り所としてきた。それだけにアイヌ民族博物館の閉館については複雑な心境で、戸惑う面もあった。しかし一方で、これから開設される民族共生象徴空間には大きな期待も寄せる。

働いてきた職員にとって職場がなくなり新しい施設ができることの意味、そのことで揺れる一時期があったことを知ってもらうきっかけとなることを期待し、胸中を率直に吐露している場面をそのまま挿入することとした。